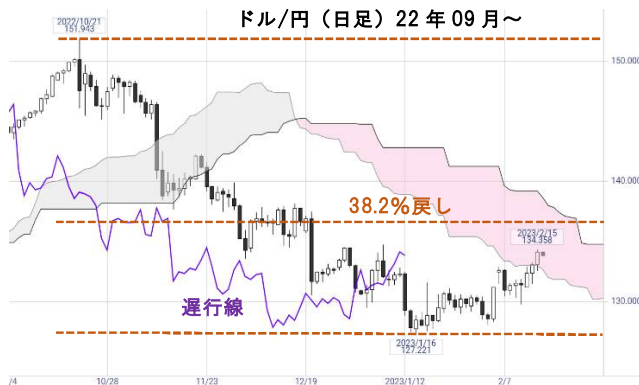


■ 当面は円の上値が押さえられやすい？

ついに、ドル/円が一目均衡表の日足「雲」下限を上抜けて、同時に日足の遅行線が日々線を上抜ける強気の展開となってきた（下図参照）。次の上値の目安となり得るのは、昨年10月高値から今年1月安値までの下げ幅に対する38.2%戻し=136,60円—70円処と考えられ、仮に同水準まで浮上すれば、相前後して日足「雲」を上抜けることにもなる。



つまり、昨年11月下旬に日足「雲」を下抜け、三役暗転（陰転）となって以来の『三役好転』を目の当たりする可能性があるということだ。

むろん、38.2%戻しの水準や日足「雲」上限などといった重要な節目が当面の上値抵抗として意識されやすいということは今さら言うまでもない。これらの節目を上方にブレイクするかどうかは、やはり米連邦準備理事会（FRB）の利上げが停止される時期、そして新たに日銀正副総裁となる面々が今後明らかにする政策方針に左右されるところが大きいと言えるだろう。

周知のとおり、足元で発表されている1月、2月分の米経済指標には強めの結果を示すものが多くなっている。米雇用統計における非農業部門雇用者数（NFP）の伸びしかり、米消費者物価指数（CPI）しかり…。昨日（15日）発表された1月分の米小売売上高や2月の全米ホームビルダー協会（NAHB）住宅市場指数、ニューヨーク連銀製造業景気指数なども、事前の市場予想や前回実績から大きな改善を見せるものが多かった。

もちろん、市場の「予想」というものが結構「曲者」であることは否定できない。もともと以前から、この1月、2月の米指標結果は季節調整を含む年次改定や米国の好天候などの影響もあって、ある程度強い結果となる可能性が高いとされていた。

そして案の定、強めの結果が出てきたわけだが、それに対して市場は意外なほど敏感に反応している。相次ぐ強めの米指標の発表を受け、少々拍子抜けするほど素直にドル強気の反応を見せている。嘘かまことか、足元では米利上げについて3月、5月はもとより「6月も追加利上げの可能性」という声まで聞かれはじめた。正直「少し冷静に」と思う。

もちろん、ここにきて円の上値が少々重くなっていることもドルの買い安心感につながっている。おわかりのとおり、それは政府が新たな日銀正副総裁として起用する方針を固めた面々の人となり市場に浸透し始めていることが大きい。

ことに、新総裁候補の植田和男氏が「MIT人脈の一員」であるということが市場に一定の安心感を与えている模様である。MIT人脈とは、70年代後半から80年代初めにかけて米マサチューセッツ工科大学（MIT）で経済学を学び、後に同大学や他大学で教鞭をとったり国際金融の舞台で手腕を発揮したりした人々で、経済学者の竹森俊平氏が2014年に上梓した『世界経済危機は終わった』（日本経済新聞出版刊）において、リーマン・ショック後の壊滅的な「危機」から世界経済を救ったとされている中央銀行家のことである。

竹森氏曰く、彼らがMITで学んだのは「純粋なケインズ主義ではないもののケインズ主義に親和的な手法」であり、リーマン・ショック後には当時のキングBOE総裁、バーナンキFRB議長、ドラギECB総裁らMIT人脈の面々が極めて大胆な量的緩和策を矢継ぎ早に打ち出すことにつながった。「植田氏もその一員」というイメージが、当面は円の上値を押さえやすいということも心得ておきたい。

（02月16日 10:30）